

ピリピ人への手紙

1～3章の復習

ピリピ人への手紙は、パウロがローマで投獄中に書いたにもかかわらず、「喜び」がテーマであることを見ました。パウロが投獄中であるにもかかわらず喜んでいたように、私たちクリスチャンにも、外側の状況に左右されるこの世の幸せ”happiness”ではなく、どんな状況でも左右されない「イエス・キリストにある喜び」があります。

1章では、私たちがいつでも喜べる理由を4つ、2章では、さらにもう2つ見ました。そして、3章では、教会内に入り込んできた異端の教えによって、1～2章で見てきた喜びの理由を見失わないように、喜びを奪われないように、「前と同じことを書きますが、喜びなさい」と、再び復習しました。

イエス・キリストにある喜びは、この世の何ものとも比べられないほどすごい希望に集中しています。つまり、この地上での聖化の過程を主ご自身が成し遂げてくださり、私たちはやがて天に上げられ、完全な栄光のからだをもって私たちの愛する救い主イエス・キリストと共に永遠に生きることができるという希望です。この喜びに勝る喜びは他にはありません。これが、私たちクリスチャンの考え方、視点、喜びの理由です。

4章

1～9：パウロのピリピ信者への愛と奨励

1節：

Q. パウロはピリピ信者をどう表現していますか？

＝パウロのメンタリティ、視点について（ピリピ信者に対する愛、投獄されている自分のことよりも、ピリピ信者のことをケアしている、共に働く伝道チームとして見ている）

「そういうわけですから」1～3章で見てきたこと。（クリスチャンの視点、考え方、ゴール＝喜びの理由）

＝主にあってしっかりと立ってください。「主にあって」自分の力で立つのではない。

＝1：29、30（ピリピ信者も、私たちどの時代のクリスチャンも、主にあるがゆえの信仰の試練を通るから）＝主に対する信仰が問われる。

2～3節：

ユウオデヤとストケ＝福音を広めることでパウロに協力して戦った”labored”

＝教会で仕え、ミニストリーに携わっていたが、争いが生じて一致していなかった。

これは、いつでも時代でも、どこの教会でも、どのミニストリーでも起こり得ること。

パウロ自身も、以前にバルナバとマルコの件で意見が別れ、別々のミニストリーへと別れていった経験があった。

＝使徒15：36～41、マルコについて＝第二テモテ4：11

第一コリントでも、教会内で分裂や争いがあったのを見ました。

Q. 争いや分裂の原因は何でしたか？

ピリピの2章で、喜びの理由の一つとして一致の大切さを見て、一致のための態度、考え方、視点を見ました。

Q. どのような態度、考え方、視点になると一致するのでしょうか？

Q. これらの節で、争いや分裂の当事者でない教会内の信者に、パウロはどのように奨励していますか？

「助ける」＝どうやって？

＝敵はいつも教会内、クリスチャン同士で争いや分裂を起こそうとしています。私たちクリスチャンは、敵の策略、攻撃法も知って、常にフォーカスをイエス・キリストに向けているべきです。自分たちも巻き込まれないように。クリスチャン、教会が、主のみこころを求め、主の福音の前進のために聖霊によって一致できるように、いつも祈りましょう！

4節：

この手紙のテーマ

Q. いつ喜びなさいと言ってますか？

今まで見てきたように、私たちクリスチャンには「いつでも”always”」喜ぶ理由があります。クリスチャンの特徴の一つは「喜び」です。

Q. なぜ喜んでいるクリスチャンはこの世で光となりますか？

Q. クリスチャンが喜んでいないと、どんな影響がありますか？

5節：

「主は近いのです。」The Lord is at hand.」＝緊急性

パウロがこの手紙を書いた時に主の来臨（携拳）が近いと言っていたなら、今はどれだけ近いでしょう！

Q. 主が来られるのが近いと知ると、私たちの生き方にどのような影響を与えますか？

＝寛容な心をすべての人に知らせなさい。”Let your gentleness be known to all men.”

＝一致、伝道、主の働きに忙しく忠実であること。（マタイ24：42～51）

6～7節：

この二つの節は暗記したいみことばです。

よく、英語では、一つ一つのポイントを質問しながらみんなで声を出して読みます。

Q. 何を、どんな状況で心配するなって言ってるの？＝何にも、全ての中にあって

（Be anxious for “what”?=“nothing”、but in “what”?=“everything”）

私たちはいつでも、どんなことにおいても、心配するかわりに、神に自分のリクエストを知っていただくように奨励されています。

Q. どうやって、何によって？（by “what”?=“prayer and supplication”）＝祈りと嘆願、懇願
考えてみてください！

人間の親でも、自分の子供が嘆願、懇願してきたら、可愛いでしょう。その願いの内容がその子にとって害のないもので、自分にできることであれば、すぐに願いに応えるでしょう。

としたら、天の父なる神は、私たちが嘆願する時、どう見て、どう応答してくださるでしょう。

大きなことにも、小さなことにも、私たちは常に日常的に神に祈りと嘆願で語るべきです。
私たちが主にリクエストして祈る時、ある要素を持って祈るべきです。

Q. 何ですか？ with “what”? = “thanksgiving” = 感謝

Q. 私たちは祈る時、なぜ感謝するんですか？（*この質問は、この後につながる！）

この6節の奨励に従った時、私たちには7節の素晴らしい約束が与えられています！

人のすべての考えにまさる神の平安”peace of God which surpasses all understanding”

=人間の知性では理解し得ない神の平安、人生の嵐の中での平安 = ヨハネ 14：27

Q. 人知を超えた神の平安は、どうしたら知ることができますか？

=経験すること。だって人間の知性では理解し得ないのだから。

祈りの後で神の平安に満たされるのは、感謝を持った祈りをした時（*さっきの質問）

なぜなら、感謝を持って祈るとは、神が祈りに応答してくださると信頼しているから。

=イザヤ 26：3、ダビデの例（詩篇34*第一サムエル21：13）、エレミヤ 17：7、8

ジョージ・ミューラーの言葉

「信仰者のうちには、思い煩いがあってはなりません。試練、苦しみ、困難がいかに厳しくとも、いかに大きくとも、また様々な事があっても、どんな状況にあったとしても思い煩ってはならないのです。なぜなら、私たちには全能の父なる神がおられ、このお方はそのひとり子イエスを愛するのと同じように神の子供達を愛し、あらゆる状況の中で彼らを支え続けるのを最高の喜びとされるのです。私たちはこのお方のみことば（ピリピ 4：6）を心に留めるべきです。

『あらゆる場合に』とは、ただ自分の家が火事の時や、愛する家族が瀕死の病気である時だけではなく、生活の中の最も小さい事柄についてもです。私たちはすべてのことを神のもとに持っていくべきです。一日中、いつでも私たちの父なる神と、主イエスとの聖なる交わりに生きていくべきです。心配事で夜中に目が覚めた時に、すぐに神に目を向けるような、霊的本能とでも呼ぶべきものを育てるべきなのです。

『祈りと願いを捧げる』とは、真剣に嘆願し、耐え忍び、神を待ち望んで、待ち望んで、待ち望むのです。

『感謝を持って』とは、いつも良い土台となります。私たちのうちに何もなかったとしても、私たちは主が滅びから救ってくださったことを感謝することができます。みことばを与えてくださったこと、そして何よりもすばらしい贈り物、御子イエス・キリストを与えてくださったことを感謝することができます。これらすべてを思う時、感謝できることには限りがないのです。

『そうすれば』ピリピ 4章7節の約束があるのです。これは何と言うすばらしい本物の、貴重な祝福でしょう。それを知るためには、経験するしかないのです。なぜなら、『人知ではとうてい測り知ることのできない』ことだからです。」

8節：

私たちが常に心に留めることのリスト（一つ一つ、その反対と対比しながら見る）

=私たちの頭の中の思考で、心の思い、行動が変わる。=みことば（詩篇 1：1～3）

9節：

パウロの例＝みことばを聞くだけでなく、行って生きる者

10～22：最後の挨拶

10節：

エパフロデトがピリピ教会からローマにいるパウロに必要な贈り物を渡しに行った。＝18節
パウロの愛とピリピ信者の相互の愛の関係からの喜び（ミSSIONナリーへの金銭的サポート）

11～13節：

貧しさ”abased”、豊かさ”abound”、飽くこと”full”、飢えること”hungry”、富むこと”abound”、乏しいこと”suffer need”、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得、知っている。

＝パウロの経験＝パリサイ人サンヘドリン議員サウロから、使徒の働きで見えるパウロの人生
＝**第二コリント 11：23～28**

そのような状況の中で、どんな境遇にあっても満ち足りる”content”＝**第一テモテ 6：6**
クリスチャンになってから最初の5年間ほど、このみことばは、私が切に願ひ求めるものだった。パスターチャックの奥さんのケイ・スミスの女性のバイブルスタディのコマーシャルで、ピリピ人への手紙の学びからのこの箇所が、カルバリーチャペルのK-WAVEのラジオで流されていた。そして、それを聞くたびに、「イエス様、私はどんな境遇でも心から満ち足りたい、これ”goliness with contentment”が本当に欲しいです」と祈り求めている。

13節＝パウロの人生＝**ローマ 15：18～19、第二テモテ 4：17**

私たちも、主を離れて自分だけでは何もできないけど、主が共にいれば、主にあって何でもできる。私たちの内側に内在される聖霊によって。＝**ヨハネ 15：5**

14～20節：

ピリピ信者のパウロへの愛が、パウロの伝道旅行を物理的にも金銭的にもサポートすることによって表されていた。それは同時に、ピリピ信者が、主にあって一致した思いで、福音を広げるために自分たちにできることだった。主に対する奉仕として喜んで与えていた。

福音を広げることで、MISSIONナリーをサポートする時、福音を伝える役割の者も、それをサポートする役割の者も、霊的祝福は主から同じように受ける。主から与えられた賜物を用いて、それぞれが自分に与えられた役割を果たすから。

19節＝すべての必要は主から来るから。

Q. 19節は、私たちの必要を誰がどのように満たしてくださると約束していますか？

21～23節：

最後の挨拶。22節は、パウロがローマで投獄された結果、「カイザルの家に属する人々」、つまりローマ皇帝の兵士、看守、側近たちが救われていったことがわかる。

素晴らしい主を褒め称え、感謝し、主にあって大いに喜び、天におられるイエス様と言うゴールを目指して生きましょう！❤

♪ In Christ Alone ♪